

## 真の安全管理 ～よい現場風土をつくるために～

愛知県土木施工管理技士会  
 矢作建設工業株式会社  
 施工統括本部管理部  
 紀 伊 保  
 Tamotsu Kii

### 1. はじめに

「もし、事故を起こすとお前のクビが飛ぶだけでは済まない。会社が飛んでしまうぞ！」これは、私がこの工事の現場代理人として選任された際、所属部長から言われた最初の言葉であった。本工事は、東海道新幹線との離隔が1.5mしかないという近接施工での大規模構造物撤去工事であった。万が一、クレーン事故や飛来事故が発生した場合、日本の大動脈とも言うべき東海道新幹線への列車阻害に直結する危険性は極めて高い。東海道新幹線の運行に支障するということは日本全体の経済活動に影響を与えることになるといっても過言ではない。冒頭の所属部長の言葉が繰り返し頭によぎった。「新幹線を止めると会社が飛ぶぞ」これ



写真-1 現場全景

は、脅しではない、安全管理を誤れば甚大な被害規模が予想されたのである（写真-1 参照）。

#### 工事概要

- (1) 工事名：南方貨物線二条第3BI 外2箇所撤去工事
- (2) 発注者：独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 国鉄清算事業本部
- (3) 工期：平成18年2月～平成19年3月
- (4) 工事場所：名古屋市南区明治二丁目地内
- (5) 工事内容：施工延長105m、RC中空スラブ撤去7連、RC橋脚撤去7基、仮設工事一式、コンクリートガラ処分約4,500 t

#### 撤去工法

上部工の撤去は、これら現場の特殊条件を反映してワイヤソーによる切断と、PC桁架設等に用いられる二組桁架設機（ガーダー）とを組み合わせた無騒音無振動の撤去方法を採用した。また、下部工の撤去についても同様にワイヤソーによる切断と、大型の門形クレーンを組み合わせた方法で撤去を行った（写真-2 参照）。

### 2. 現場おける課題

私は当現場のように重大事故と背中合わせの緊迫した現場では、チェックシートやパトロールだ



写真-2 作業状況

けの一方的な安全管理では十分とはいえないと考えた。作業員一人ひとりが目的意識を持ち、主体的に行動できる真の安全管理を追及しなければ無事故無災害は達成できない。そこで、作業所が一致団結し、相乗効果を高めながら安全に工事を進めることができるよう、いかにして関係者の意識改革を行うかということが課題であった。

### 3. 対応策・工夫・改良点

#### (1) 作業所の安全方針

作業所安全方針：「全作業員の安全意識高揚を図りヒューマンエラーを撲滅する」

この安全方針は、きわめて抽象的で、全ての現場において当てはまることでもあり、産業全体の常識といっても良い。しかし、事故はこの常識的なことが実行されていないから起こるのだ。言い換えると、この目標を実現することが、いかに難しいかということになる。そこで、当作業所では、この目標を実現するための具体的な方策として、安全意識を高揚させることを目的として教育訓練による要員全体のレベルアップを図った。また、ヒューマンエラーを撲滅させることを目的として、職長会を通じた小集団活動を推進し、作業員一人ひとりの危険に対する感受性を高め安全管理に対する主体性向上を目指した。

#### (2) 安全衛生教育訓練

私は本工事を施工するにあたり、作業所安全方

針をはじめとした安全に対する取り組み姿勢を浸透させる必要性を強く感じた。そこで、着手時に全作業員を対象に安全衛生教育を実施し、その後も繰り返し指導教育していった。主な内容として以下に示すが、これらの小見出しをキーワードとして実際に現場で取り組んだ教育訓練の内容について述べる。

##### 1) 安全の3原則

「安全は全てに優先する」「自分の身は自分で守る」「ルールを守る」この三原則は優先順序をつけるようなものではないが、この中でも特に強調した点は「ルールを守る」ということである。現場での禁煙や駐車車両の歯止めの励行、反射チョッキや安全帯の着用などのルールは、職長会を通じて全員の合意を得て決定した。そして、元請職員、職長らが率先垂範して徹底的にルールを守った。ルールを守るということは、安全に関する妥協を許さないということなのである。

##### 2) この現場は危険な現場だ

新幹線近接、住宅密集地での大型構造物撤去工事における第三者事故ならびに周辺環境の悪化、機械及び重量物取り扱い事故など、現場固有のリスクを特定し、危険有害要因の抽出を行った。また、新規入場者には、これらのリスクによる被害規模を説明するとともに「現場必修五ヶ条」を定め、必ず守るべきことを列挙した。その内容は、あえて単純かつ当たり前な書き方をし、作業員に

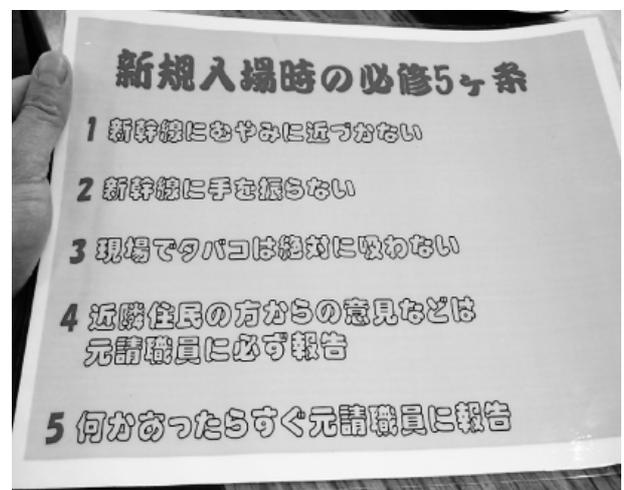


写真-3 現場必修五ヶ条

対して形式ではなく意識として残るようなものにした（写真-3）。

3) 全管理は一人ではできない。

安全管理は元請の職員だけが行うものではない。一人ひとりの努力によって達成されるものなのだ。1,000人の作業員の内、一人でも不安全行動をすると事故につながる。怪我をするのは自分かもしれないが、999人を裏切る結果になるのだ。

4) いつも妻が横に立っている。

事故というものは、ちょっとした隙から生まれるものだ。しかし、人間は元来、省略や近道行為、手抜きや見切り作業、うっかりやボーっとしたりする生き物である。本当の集中力は20分程度しか持続しないものとも言われている。実際の建設現場では、猛暑や風雪、工程短縮や残業、体調不良など集中力を欠く場面がしばしば見受けられる。そんな時、「いつも妻が横に立っている」と思うことで、本当に守るべきものがわかるはずだ。家で待っている奥さんや子どもたちが何を一番に望んでいるか。それは、出来高でも工程短縮でもない。怪我をせずに元気に帰ってくることに他ならないのだ。そして、我々元請職員は作業員の家族になり変わって、あるときは厳しく、あるときは親身になって指導注意を繰り返した。安全に関する妥協はその人の家族までも不幸にしてしまうのだ。

5) 継続は力なり。事故は今日、明日、明後日？

同じ内容の作業が繰り返し続く場合、安全管理もマンネリ化してくる。こうした事態を打開するため、常に新しい情報を発信した。その主な活動として、ヒヤリハット活動や事故事例などの失敗例の水平展開に取り組んだ。ここで、類似しない他の現場の事例あるいは統計的な話に終始しても、作業員一人ひとりの意識には浸透していかないであろう。そこで、これらの事例を発表する際は、事故の結果以上に想定される被害規模の余波を拡大評価し、事例発表の冒頭に伝達するように心がけた。失敗体験には人々の関心、興味をひきつける不思議な力がある。そして、肝心なことは、こ

れら失敗例のマイナス面を、今後立ち向かう工事に対してプラスに働かせることであることは言うまでもない。

(3) 職長会を通じた小集団活動

ヒューマンエラーの撲滅は、教育訓練のみで実現できるものではない。作業所の方針と各人の安全意識、そして一人ひとりの「行動」によってなされるものである。しかし、現実には性格や価値観、技量や立場も異なった個人の行動を効果的に管理するような都合のいい手法は存在しない。個人の行動は、やはり一人ひとりの責任感と作業に対する主体性に頼らざるを得ないのである。それでは、どうすれば末端作業員まで主体性をもって仕事に望んでもらえるかということで、当作業所では職長会を通じた小集団活用を積極的に展開した。以下に、実践した小集団活動について述べる。

1) 職長会による朝礼司会

朝礼の進行を職長会主導により実施した。司会者は各社の職長の持ち回りとし、朝礼時での作業間の調整、注意事項、行動目標などを職長が毅然とした態度で配下の作業員に向き合って発表した。目的意識のある職長の下では作業員の意思統一が容易である。反面、だらしないリーダーの下で働く作業員は、ますますだらしくなるものである。

2) 各班ごとの作業前ストレッチ体操の励行

ラジオ体操の後、各班が円陣を組みストレッチ体操を行った。ここでは、その日の体操のリーダーを指名し、内容も順番もリーダー個人に委譲した。柔軟体操という身体的な効果以上に自主性の向上やチーム内の良い雰囲気醸成に一役を担ったと思われる。

3) 今日の一言

班毎に、職長がランダムに指名した代表者一名に「今日の一言」と称して、発言を促した。発言の内容は、仕事のことでもそれ以外のことでも良い。自分が指名されるかもしれないという緊張感と、仲間の発言に対する興味を引き出すことにより、参加意識を高める効果があったと思われる。

#### 4) 職長会からの意見要望

職長会を有効活用し、個人としてあるいは一協力会社としては、なかなか言いにくい元請への要望事項を職長会の意見として聴取することができた。そして、職長会からの要望については可能な限り尊重し対応するように努めた。職長会の存在価値とそれに属する全作業員への連帯意識を高めるためには、若干の出費も「ありがたい意見、なのである。

#### 5) 職長会主催での懇親会

職長会主催で焼肉大会を実施することにより、日ごろの労をねぎらい英気を養うとともに、協力会社間の懇親を図り、コミュニケーション豊かな職場環境の醸成が図られた。また、休日には懇親会の一環として海釣り大会を企画するなど、仕事以外でも良好な人間関係を築くようになった。複数の協力会社が混在する建設現場では、こうした人間関係が安全に対する連帯感、作業間の潤滑油として、いかに重要であるかは言うまでもない。

#### 6) 快適な職場環境の形成

当作業所では、隣接する小学校の児童からポスターを募集し、「子ども110番」と称して、犯罪防止など地域貢献に積極的に取り組んだ。また、安全衛生の工夫にも取り組み快適職場の認定も受けた。こうした作業所の積極的な取り組みが快適な職場環境を形成し、作業員にとってやりがいのある気持ちのいい現場となるよう努めた（写真-4）。



写真-4 子ども110番

#### 7) 作業員の行動、心理に対する影響力

ヒューマンエラー防止のためには、作業に直接従事する作業員の意識も大切であるが、作業員の

行動、心理に対し影響力を与える者の安全意識が重要である。そのためには、職長や元請職員が率先垂範し、妥協無き安全への取組みを繰り返すしかない。また、作業指示等のコミュニケーションを確実に実施するとともに、指示を受け入れる気持ちにバリアをつくらぬような挨拶運動も重要である。

#### 4. おわりに

建設現場は、他産業と比べ施工条件や天候などの自然環境に対する影響も大きい。また、大型の重機が輻輳する中で多くの作業員が混在して作業を行うためその危険性は非常に高いといえる。私は、そうした建設現場での安全管理として最も重要な事は、「良い現場風土」の醸成に他ならないと考えている。いくら知識・技能・技術が備わった優秀な人物であっても一人だけでは安全管理を成し遂げることはできない。無災害完工とは工事に関わる全ての人々が、自分は事故を絶対に起こさないという大きな目標を目指し、一致団結してこそ、成し遂げられる偉業なのだ。そうした「良い現場風土」をつくるためには、十分なコミュニケーションと目的意識の統一を図ることが重要なのである。建設現場で働く多くの人たちが互いに声を掛け合い、無災害という目標に向かって協力し合う。それはものすごく大きなパワーであり、そしてこれほどやりがいのある仕事はないだろう。



写真-5 一致団結